オランダ便り

はるにれの会
向山　陽子

"Noora, Good Morning !" みづきは、私の手をふり切って、フィンランド人のお友達の方へ走っていきました。二人は笑いながら、凍りついたグラウンドをスケートのようにすべって、私に手をふり International School Of Amsterdamの建物に入っていきます。

ここは、オランダ。

十一月二十五日、みづきの七歳の誕生日の朝、この冬初めての氷点下になり、五月から咲き続いていた紫陽花（そうなんです。こちらの紫陽花は夏の間、ずっと咲いて、秋には深い赤になりドライフラワーにします。）が、一夜にしてしおれました。それから一週間、日中も零下四～五度の日もあり、運河は凍りはじめ、芝生の緑の上に細かい氷がふりつもっています。

毎朝夕、母子二台の自転車を連ねて　オランダの人々と一緒に"Gocie morgen !!（Good morning）"と、自転車道路を、二十分ずつ往復していた自転車通学も、この寒さではちょっとお休みです。　車のガラスの氷おとしから、朝がはじまるようになりました。去年も、その前

の年の冬も、自転車通学が可能なマイルドな冬だったとのこと。今年は八月頃から「夏のこの異常な晴天続きと、八月中に朱い実がなっているので、今年の冬は寒い。」と、オランダ人から聞いたことがあります。

そして、お隣のおじさんも過去二回しか経験したことのないという〝オランダ中の運河を走るスケートレース〟が今年は開かれるでしょうか？早速、三人のスケート靴を買い揃えたのですが……。

▲　自宅裏の運河で、到着後すぐ写す

幼稚園を卒業したばかりの娘みづきと、夫の待つオランダ・スピポール空港に降り立ったのは、八か月前の四月初めでした。

久し振りに会う夫の手には何と花束!!（もちろん、同僚の方達に持たされたのは一目瞭然でしたが、やはり嬉しいものです。）そして、どんよりとした曇り空と、一歩外へ出たとたんに鼻をさす有機肥料の臭い、みづきのオランダでの第一声は

「オランダ嫌い!!
　　においが嫌い!!」

これには、夫もショックだったようです。そのみづきが「オランダはいいところです。」と日本への手紙に書くようになるのに、一か月もかかりませんでした。

◎「ワーイ　引越しだ」

みづきに「引越しよ。オランダっていう国に住むことになったのよ。」と、告げたのは、夫の赴任が決まってすぐでした。

みづきは「ワーイ　引越しだ！」と大喜びです。

彼女にとっては、幼い頃から一緒に遊んだ友人が、何人も引越していった経験があります。幼稚園でも、子どもの卒園を機に近郊に家を持って引越していく方、親の転勤のために引越す方など、練馬、杉並、中野の区境あたりに住む、幼稚園児を持つ位のサラリーマンの家庭にとって、引越しはめずらしい事ではありません。

娘は、今までいつも残される側にいました。引越していく人達は、不安や疲れを見せながらも、忙しそうで、ある日突然いなくなり、家だけが今までと違う顔をしてそのまま、そこにありました。そしてある日、全く違う人達が住みはじめる、という風でした。

たまに　引越していったお友達の新しい家に招かれることがあり、行ってみると、多くの場合、新しい家だったり、大きな家だったり、おじいさん、おばあさんがニコニコ迎えてくれたり……。我が家に帰ると娘は私に言いました。「○○ちゃん、いいね。引越しして。」

みづきにとって〝引越し〟は　何か新しい良い事が起こる、すばらしい事としてあこがれる対象になっていたようです。

私にとっても、結婚以来十三年間住んだ家は、大家さんをはじめ、近隣に良い方達に恵まれ、実り多い十三年でしたが、このあたりで、心機一転、生活を整理整頓したいと常々思いながら、中途半端でしたから、引越しは初めての体験として、何かワクワクするものがありました。

又、引越す時期は、母子共々育てていただいたH幼稚園を卒業してから、と決めました。

娘にとっても、お友達と一緒にH幼稚園を巣立ち、オランダで、日本人学校に入学するか、インターナショナルスクールへ入る場合は、八月の新年度始まりまで、（六月までの二ヶ月と夏休みの二ヶ月）新しい土地に慣れるのにちょうど良いと考えたのです。

▲　ホールンの町で、民族衣装の女性と

◎「オランダってオランダ語？」

外国に住むことも、娘にとっては、外国に住む親類、いとこ、友達と同様の体験ができること以外の何ものでもないようでした。もちろん、漠然とした不安はあるようでしたが、「リサと話せるようになるかな？あかねや、かおりちゃんと英語で話せるかな？」と、憧れを表すみづきでした。

オーストラリアに住む、親戚のリサが日本を訪れた時、「前、来た時はもっと日本語を話していたのにね。」と、お互いの国でのそれぞれの言語面での成長を、日本語の側から感じとっていました。

又、オランダ行きが決まる前の夏、私の弟家族、友人家族が住むアメリカを訪れた時、デトロイト

空港で、わからない言葉の中に放り出された程度の不安も経験し、又、十日程して、慣れて、化粧室で、手の届かない水道の蛇口を、アメリカの御婦人に回してもらい、「『サンキュー』って　みづきが言ったらニコッと笑って、『何とかかんとか』って　言ってくれたよ。」と、「サンキュー」が通じた喜びも体験している娘でしたので、私も、どうにかなるさと楽観できました。

それよりも、アメリカから帰ってから、幼稚園で「サンキュー」「エクスキューズミー」を連発する娘に、私は閉口しました。今に嫌われるよと思う反面、言葉が通じたことがよほど嬉しかったのだろうと、見て見ぬふりしかできませんでしたが――。

◎私にとっての〝海外〟

「海外行きが決まったよ。」と夫から告げられた時、私は行き先も聞かずに「ウン、行く。」ととびついてしまいました。

一人娘が成長するにつれて、良い仕事にも恵まれ、娘の小学校入学を機に、もっと仕事に力を入れたいと考えていた私でした。

夏のアメリカ行きがなかったら、「せっかく良いお仕事が巡ってきたのに……」と、オランダに来るのを渋っていたかもしれません。

アメリカの弟宅で、留学中の若いカップル達に会い、又、友人宅で、海外駐在の方々、中には単身赴任の方々の話を聞き、私なりに家族について考えさせられていました。

そして、オランダでの生活の経験は、私の人生に大いにプラスになるとも思いました。

かくして、「しばらくは、旦那様と、お子さんのために、支える側でがんばってね。」「あなたの事だから、間違ってもウツ病にはならないと思うけれど、日本の事も忘れないでね。」などと、励まし（？）や、暖かい言葉をたくさんいただいて、出発する事になりました。

八か月たって思うのは、日本にいた時よりも、夫が近くに見えるのです。共にいる時間が長いからでしょう

か。あいかわらず、オランダの人達から見れば信じられない位、長時間会社にいるし、出張も多いし、休日も仕事関係で出ていきます。でも、互いに頼りあうようになったのでしょうか？　家族の絆は確かに強くなっています。逆に言えば、帰国した時が危ないという事なのですが——。

◎とうとうオランダ到着

とはいうものの、住む家が決まらぬまま、みづきの学校を、日本人学校にするか、インターナショナルスクールにするかも決まらぬまま、日本人学校、又は、日本語補修校の入学式にギリギリの四月はじめに、オランダに着きました。せめて区切りとして、入学式には間にあわせてやりたかったのです。

ホテルに着くと早速、夫と、娘の学校についての話しあいです。インターナショナルスクールに魅力は感じるけれど、日本語の獲得に大切だといわれる小学校低学年、安全策として日本人学校にしようか……？　オラン

▲　マルクマールのチーズ市，日本のお友達と

ダ現地校は、オランダ語が親子とも全くだめなので、無理と判断しました。（日本人学校でも、インターでも、オランダ語の授業があります。）

いろいろと話しあいました。結局、無謀な選択かもしれないが、日本語に不安が出てきたら、日本人学校にかわれば良い。せっかく日本から出てきたのだから、世界に いろいろな国があることだけでも 体で感じとってくれれば、幼い時期、海外で生活した意味があるのではないかと、インターナショナルスクールへの入学を決めました。

オランダに着いた翌々日、ホテルから Amsterdam Japanese Saturday School（アムステルダム日本語補修校）の入学式に出かけました。そして、補修校には、私達のような海外勤務のお子さんばかりでなく、オランダに住みついて、父、又は母親の母国語を学ぶために入学したお子さん、又、オランダの小学校に通っているお子さんもいらっしゃる事を知りました。先生方も、オランダの方と結婚して住んでいる方、留学中の方々、とさまざまです。校舎は、アムステルダム日本人学校を借りて毎週土曜日、九時半から三時半まで、国語、算数（社会…二年生以上）の日本語による授業をうけることになりました。

次の週は、インターナショナルスクールでの面接です。ディレクターとの面接で入学は許可され、学年を決める段になって考え込みました。インターでは五歳入学なので、娘と同学年の子ども達はすでに一年生として、あと二か月を残すのみとなっています。日本で、学校生活を経験していないし、一年生では月齢が下から二番目になるというので、英語での生活に慣れるためにも、夏休みまでの二か月を Kinder garten に入れることにしました。

はじめての日、さすがに不安らしく、私の手を離しません。一時間ほど一緒にいましたが、三歳から五歳までの混合クラスのため、三歳児が、私がいるために、母親を思い出したらしく、泣き出しました。「おかあさんがいると他の子もおかあさんを思い出すから。」と言うと

「わかった。」と手を離しました。

二日目も、もじもじしながらも、他の日本の子ども達に囲まれて、先生の話す英語も、友達に通訳してもらっている様子。二十人のクラス中、何と日本人が五人もいるのですから。

▲　遊園地エフテリングで。ごみを入れると
Pepier　hier〝紙くずはここへ〟と話すくずかご(?)

登校をいやがりもせず、下校後も、毎日のように日本人のお友達と遊び、順調にすべり出したかにみえたインターでの毎日でしたが、この二か月は、娘にとって大変な日々だったようです。自分は日本で、幼稚園を卒業してきているのに、小さい子達のレベルで毎日を過ごさなければならず、英語面では、年下のEちゃんに全面的に頼らなければならない。四歳のEちゃんが正しく娘の気持ちを通訳できるはずもなく、時として誤解されたまま、訂正することもできない等、フラストレーションはかなりたまっていたようです。顔つきも心なしかきつくなってきたなと感じていた一か月程たった時でした。夫が、ちょっとした事で娘をからかったのです。すると、びっくりするような声で泣き出し、「みづ

きはね。毎日、言葉のわからない学校に行ってるんだからね。」と訴えるのです。私の胸で三十分程泣いておさまりましたが、夫も「おとうさんも毎日、英語でみづきと一緒に泣きたいよ。」としんみりしていました。

インターに通学しはじめて　二週目に「紙ちょうだいってCan I have a paper? って言うのよ。」とNativeな発音で　教えてくれたり　「May I go to toilet?」「Tidy up!」とどんどん耳から英語が入ってきているなと、喜んでいた頃でした。

今、この子を支えられるのは、私と夫しかいないと実感した出来事でした。

こうして迎えた年度末の日、一人前に成績表などを頂いて帰ってきた娘に、「よくがんばったね。ごほうびにごちそうを食べに行こうか！」と声をかけずにはいられませんでした。お友達からの誘いを断って、母子二人でゆったりとすごしたかったのです。出張中の主人からも電話が入り、娘はほめてもらっていました。

二か月の夏休みを、よく遊び、よく勉強してすごし、新年度、娘は一、二年生合同クラスとなりました。同年齢のお子さん達との毎日を、喜々として通学しています。

「Sundiのクラスの時にね。みづき、英語で何て言っていいかわからなかったのよ。でも今なら　わかるよ。」最近、こう言うことが多くなりました。E・S・L（English Speaking Lesson）もはじまりました。Dancing, Drama, Assembly, Music, Art……等、日本とは違う教科もあります。教育方法も異るようです。世界各国から集まった子ども達の四分の一が日本人という現実もあります。

上級生になると、日本の勉強が追いつかないと、日本語の家庭教師をつけたり、日本と同様、おけいこ事に追われ、「ジャパニーズは、父親も　母親も　子どもも忙しすぎる。」と他の国の人達に言われています。

又、日本人が、安全な地域や、スクールバスの沿線を選んで住むため、日本人の多い地域ができ、その地域の

地価や、物価が上がると、現地の人達に指摘されています。

緑と花がいっぱいで、鳥のさえずりで目をさまし、夏はサイクリング、冬はスケートを堪能できるこの土地で、子どもを育てる事ができるのは、本当に幸せです。ゆったりとして、ニコニコと笑いかけてくれるお年寄りが幸せそうなこの国の人々に学ぶべき事がたくさんあるように思われます。

親子三人、心豊かな毎日を送れることに感謝して、オランダの事をもっともっと知りたく思います。又、インターで世界各国の方々と話したくも思います。

「二月、雪割草が咲くと、クロッカス、水仙、ヒヤシンス、チューリップ……次から次へと花が咲くよ。Mooi tuin!!（nice garden!!）」オランダの人達は、自分で庭をつくり、自分で家を修理し、冬に備えます。私も、二百五十個の球根を娘と植えました。

こうして、この土地を好きになっていくのだなと思いながら。

暖かい懐にうけとめてくれた穏やかなオランダの隣人たちに、好まれる家族でありたいものです。

（オランダ在住）